

序説

口永良部島が、「密貿易」の地であったことがわかったのは、大正9年の川上久良の「密貿易口永良部島絵図」である。現地聞取調査の結果を記録した。当時の古老からの聞取と見聞である。「密貿易」の拠点であった事は間違いないが、口永良部は以前にも「良港」として海上航路の中継地点となっていたのに何故、「密貿易」の拠点と言われるようになったのか。ならばいつでも利用していた筈である。西郷隆盛や名越左源太も又慶長9年には、琉球攻戦の時も一時寄港している。その「良港」が、川上久良の公表により「密貿易」と言われるように成った事は、薩摩藩の五百万両の借財と家老調所広郷の政策が関係するものと推測する。其処で、調所広郷の南島貿易を中心にして口永良部島をどう位置づけたのか、口永良部島の「密貿易」は藩公認であった事を検証する。事によって私が小さい時に見聞きした事原風景が重なり合うのではないかと考えたのである。

第1章 家老調所広郷の経歴<sup>1</sup>

調所広郷は、一昔前の熱血な典型的サラリーマンである。サラリーマンの宿命は出世である。そのことから言えば調所広郷は、鹿児島城下で生まれ、裕福ではなかったが養子に行き改名し一人の上士(藩主)重豪に会い引き上げてもらい江戸へ行く。西郷隆盛も同じで、島津斉彬に会い引き上げて貰い江戸へ行く。調所広郷23歳、西郷隆盛26歳であった。調所広郷はこれから街道を息もつく間もなくまっしぐらに駆け上がるのが、53歳の財政改革主任を全権を持って任された時である。当時の薩

調所広郷略歴	西暦	元号	年齢	役職	出来事
	1778	安永5	1		鹿児島城下誕生
	1788	天明13	13		元服
	1790	寛政2	15		表茶道清悦と改名
	1798	寛政10	23	奥茶道	高輪邸重豪付奥茶道
					笑悦と改名
	1800	寛政12	25		鹿児島嶋帰省結婚
	1802	享和2	26		長男笑太郎誕生
	1804	文化元年	29		芝藩邸齊興付
	1811	文化8	36	茶道頭	家格1代新番
	1813	文化10	38	小納戸	笑左衛門と改名
	1815	文化12	40	小納戸頭取・御用取次見習	家格小番
	1818	文政元年	43	使番	
	1822	文政5	47	町奉行	
	1824	文政7	49	御用人格両隠居続料掛	小林地頭
	1825	文政8	50	側用人・側役勤	佐多地頭
	1828	文政11	53	財政改革主任	実名広郷と改める
	1830	天保元年	55		鹿屋地頭 三島方設置
					重豪 金五十万両備蓄・古借証文回収
					買物方蔵設置
	1831	天保2	56	大番頭	
	1832	天保3	57	大目付格	家格寄合
					家老格・側詰勤
	1844	弘化元年	69		琉球産物方設置
	1846	弘化3	71		琉球在藩奉行倉山作太夫
	1847	弘化4	72	軍役総奉行	軍役方設置
	1848	嘉永元年	73		芝藩邸で没する 嘉永明党処分相次

図 1 調所広郷の略歴

<sup>1</sup> 『調所広郷』 芳即正著の略年譜の省略 P 287～297

摩は、俗に77万石(72万石)<sup>2</sup>の雄藩ではあったが、見かけだけのもので、実は貧藩であった。米高ではなく薩摩藩は杻高で37万石(32万石)<sup>3</sup>程度であった。<sup>4</sup>その程度の藩が、500万両の借金をしていたのである。到底返済できる額ではない天文学的金額である。にも拘らず藩主島津重豪は、調所広郷に、3つの事を言いつける。①古借証文回収 ②平時及び非常時手当をする ③10年で50万両の積立金をする<sup>5</sup>であった。事の問題はない筈だが調所広郷は晩年には芝藩邸で服毒自殺をするのである。調所広郷は、借用証文の書き換え時には大阪商人を重豪に対面させての問答がある。又非常時の場合とか、積立金は誰が考えても同様だろう。がしかし500万両の借金を返済するために過激な改革をした張本人であると言うレッテルが貼られた。それが俗に「密貿易」に関係するから、直接的な原因ともなっているが歴史の誤謬であると改めて検証がされている。<sup>6</sup>

## 第2章 「密貿易」の実態

島津重豪が私腹を肥やしていたのではない。何故ならば、「徳富蘇峰は、重豪を評して、「秦皇・漢武(秦の始皇帝・漢の武帝)の型であった。日本でいへば、恐らくは彼の始祖と称する頼朝よりも、却って清盛入道に類似した点もあった。それは傍若無人に、自個の意志を励行し、強行する点に於いて。而して英邁にして、進取の氣象に富み、所謂の月並みの繩墨を逸脱する点に於いて」と言っているが面白い例えようである。<sup>7</sup>非常に個性に富んだ英邁・進取な気質はリーダーとしてあるべき姿であろう。その結果借金が500万両になったとすれば、薩摩藩にとっては投資である。国家で言ったら財政出動であり、まさに現代とは真逆の政策をしたのであった。その実行最高責任者が調所広郷である。しかし調所改革には痛みも伴った。商人始め、大島の農民であるというが、農民の中には益に預かった者もいる。調所広郷は江戸と鹿児島を、25歳～73歳迄の間に、距離四百四十里、おおよそ1700キロある<sup>8</sup>、そこを15回以上も往復している。熱心に地元を足運び策を練った事であろう。23歳で江戸へ行って25歳で帰国した、帰国中に結婚し男子笑太郎が、翌年26歳で誕生しても29歳時は芝藩邸にいる。駆け足人生であるとはこのことだ。では何故こんなにしてまで急いだのだろうか。その鍵が次々の藩主島津斉興となり、次の藩主島津斉彬の登場により状況が変わる。その事の例えとして原口泉先生は、「鹿児島ものさし」<sup>9</sup>という言葉で形容している。「鹿児島ものさし」とは、鹿児島では西郷隆盛は、神様のような存在であり、悪口だけは絶対に言ってはならない。この神様の敵は自分の敵でもあった。西郷が評価する

<sup>2</sup> 維新の系譜 原口泉 P136

<sup>3</sup> 維新の系譜 原口泉 P136

<sup>4</sup> 鹿児島県ホームページより

<http://www.pref.kagoshima.jp/ab23/pr/gaiyou/rekishi/tyuusei/shihgai.html>

<sup>5</sup> 幕末の薩摩 原口虎雄 P81

<sup>6</sup> 原口虎雄先生、原口泉先生の著書

<sup>7</sup> 幕末の薩摩 原口虎雄 P33～34

<sup>8</sup> 維新の系譜 原口泉 P73

<sup>9</sup> 維新の系譜 原口泉 P124

人物は優れた人物という「ものさし」があった。西郷が信奉した人物こそ島津斉彬である。

### 第3章 島津斉彬の陰

島津斉彬は、藩主になったのは、1851年(42歳)である。余りにも遅すぎる家督相続である。理由は割愛し別論にて検証する。島津斉彬は藩主になりたくてもなれなかった。島津斉興が、反対した。その理由が滑稽である。西洋かぶれで浪費癖がある、まるで重豪の二の舞になるということである。重豪派と斉宣派の対立があり斉宣は肅清をやった<sup>10</sup>。重豪は斉彬に藩主になってほしい。重豪—斉彬ラインと斉興—久光ラインに藩が二分された。重豪派と斉宣派の対立を「近思録崩れ」、「嘉永明党事件」といい。斉彬と久光の対立を「お由羅騒動」と呼ぶ。図2より重豪は、財政拡大藩主、斉宣は、財政緊縮に戻そうとして「近思録崩れ」「嘉永明党事件」が起こり結果、財政緊縮へとすすみ斉興も路線を引き継ぐが、次を誰が藩主にふさわしいかで「御由羅騒動」が起き、結果財政拡大の斉彬が藩主となる。そこで重豪に引き上げられた調所広郷は没する迄薩摩藩の財政の責任者であった。没して即藩主になったのが、島津斉彬である。この間に藩は財政政策で「密貿易」をしたことになっている。しかし、「密貿易」とは広辞苑によると「法を犯してする貿易」とある。法とは幕府である。薩摩藩は幕府に対して実地している行事及びお手伝いは、①1年後との参勤交代 ②慶長10年江戸城築手傳 ③元和5年江戸城普請 ④元禄10年比叡山寛永寺本堂造営 ⑤島津義弘養女の婚姻 ⑥慶安2年江戸城西の丸普請 ⑦竹姫の輿入れ ⑧宝暦治水工事等、薩摩藩の幕府に対する忠誠は並々ならぬものであった。そのような状況時の調所広郷の薩摩藩五百万両の借金財政改革である。結果調所広郷は、みごとにやってのけた結果、表向きは病死であるが、新事実が原口虎雄・原口泉教授により再評価された。背景が、重豪に信頼され抜擢された調所広郷は、同じく重豪に寵愛された斉彬にとって邪魔な存在となった。調所広郷は、図2①のラインであり島津斉彬は、②のラインである。それでいて①と②の間には熾烈な家督継承争いがあり薩摩藩が二分するくらいであった。又斉彬は幕府阿部正弘と結託し密通があった。それが薩摩藩の「密貿易」である。責任者が調所広郷であったことが材料となり全責任を全て引き受けて闇に葬った。

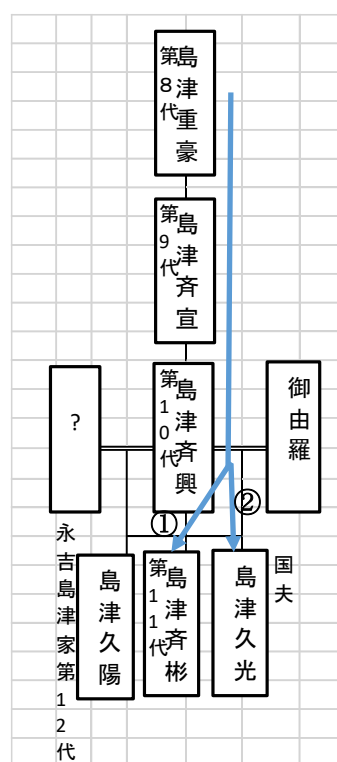


図2 薩摩藩主略図

### 第4章 1枚の絵図

川上久良の一枚の絵図が、大正八年九月十五日に描かれた口永良部島である。鹿児島県立

<sup>10</sup> 「嘉永明党事件」であり「近思録崩れ」である

図書館アーカイブ『密貿易所タリシ熊毛郡上屋久村口永良部島全図』で紹介されている。

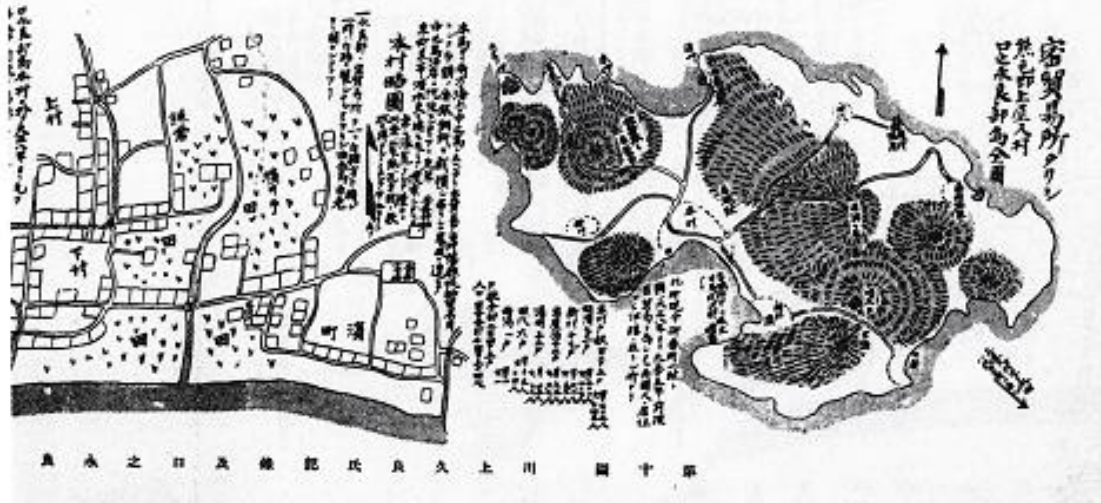


図 3 川上久良の口永良部島絵図①

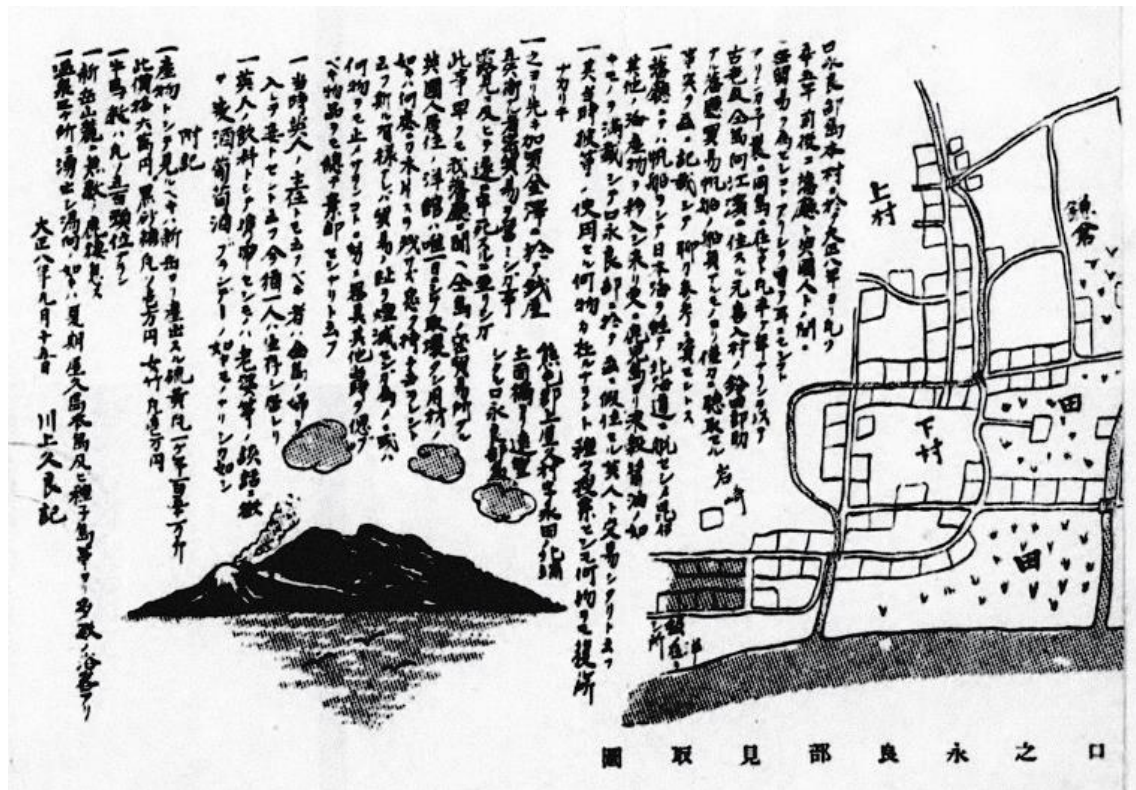


図 4 川上久良の口永良部島絵図②

絵図は、聞取によるものであり、又川上久良は現地に赴いている。絵図の文脈に関しては深澤秋人氏らの『琉球・薩摩交流史の痕跡』に詳細に解説されているので参照するとして、ここでは川上久良についてな人物かを検証する。野田幸敬氏の『島津家家臣団集系図』によると川上氏二男家筋 家格寄合 本領串木野とある。父久達の兄は、親之であり、親之は、

藤十郎福崎助八季修に養子に行き名を改め藤十郎季連となつて福崎季連である。福崎季連は、第2代霧島神宮宮司を明治10年12月12日より明治31年9月18日迄20年9か月奉職した。生まれは天保4年(1833年)12月に17日で、安政5年12月に16日に、福崎季修の養子となる。後醍院真柱に国学を学び八田知紀に歌を学んだ。安政目6年には御目付役、明治初年には御兵具奉行、兵器奉行などを務め、明治5年には琉球在番奉行に任命され、明治9年には鹿児島に戻った。明治10年12月第2代霧島神宮宮司となった。退官後は、明治33年には官幣大社大和神社宮司、明治34年には官幣中社白峯宮宮司となり、明治41年に退職。明治43年(1910年)6月1日に78歳で没した。<sup>11</sup>ここで注目は、明治5年～明治9年迄琉球在番奉行で琉球に居たことである。

#### 第5章 口永良部島の「密貿易」に関するトピックス

- 島津重豪の死 → 1833年(天保4年)
- 調所広郷の死 → 1848年(嘉永元年)
- 御由羅騒動
- 島津斉彬の藩主就任 → 1851年(嘉永4年)
- 名越左源太遠島(口永良部島到着) → 1850年(嘉永3年)
- 銭屋五兵衛の死 → 1852年(嘉永5年)
- 西郷隆盛(帰路口永良部島到着) → 1862年(文久2年)
- 薩英戦争 → 1863年(文久3年)
- 洋館の破壊 → 1864年(文久4年・元治元年)
- 川上久良の絵図 → 1919年(大正8年)

口永良部島の「密貿易所」が、銭屋五兵衛の死後、一日にして取り壊された<sup>12</sup>との古老の証言は、上記により死後12年後の事になり矛盾する。深井甚三氏の『銭屋五兵衛と抜荷』によると、鍋木氏は川島氏の説を承認した<sup>13</sup>が、若林氏これらの説を否定した<sup>14</sup>。とある。ここで言う承認とは、「抜荷」の事実の事であり、洋館が一夜にして取り壊されたこととは異なるが、若林氏は否定の理由の一つに、12年後の事であることを上げている。<sup>15</sup>口永良部島が「抜荷」の基地であったかどうかは別にして洋館らしきものがあり取り壊されたのは事実であろう。何故ならば、川島元次郎が聞取をした人物で、「向江浜に住スル元喜入村ノ

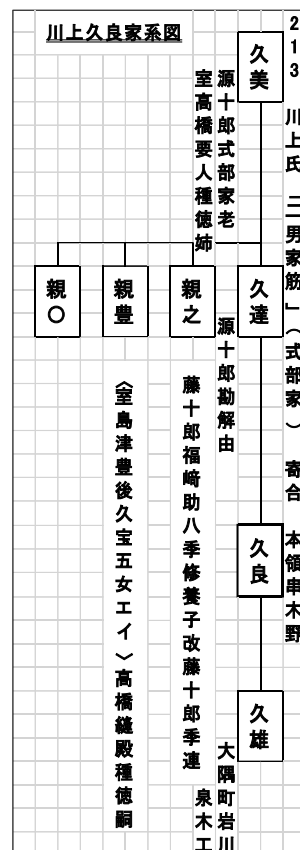


図5 川上久良家系図

<sup>11</sup> 霧島神宮誌.2019年.P460 - 462

<sup>12</sup> 図4(記載)の内容の一部である

<sup>13</sup> 鍋木.銭屋五兵衛の研究.7章6

<sup>14</sup> 若林喜三郎.新版銭屋五平衛.4章3

<sup>15</sup> 注12.13は、深井甚三『銭屋五兵衛と抜荷』より引用.P120

鈴四郎助」は、屋久島法務局の明治の課税台帳に名前が記載されていたからである。<sup>16</sup>そこで上記のように洋館が破壊されたのは、薩英戦争の跡であることに注目したい。

## 第6章 結論

最後に、口永良部島の「密貿易」はあったがしかし、疑問が残る、幕府や藩公認の貿易ならば「元禄国絵図」と「天保国絵図」の口永良部島に、異国船遠見番所がある事が納得できる。又在藩所らしきものがあつた事も合点がいくのである。「口永良部島が「密貿易」に大きく拘わつた事に、調所広郷が関係するかは検討しなければならないが、状況から見て藩財政改革の責任者であつたことを鑑みると心境を顧みる事が出来る。口永良部島が「密貿易」の基地と言うよりも、鹿児島から100キロメートル大島から200キロメートル間に諸島があり一番の「良港」であつたので、貿易港として「ハブ港」の役割を一時的に果たしたことは間違いない。

## 第7章 小括

徳永和喜氏の『海洋国家薩摩』より引用して小括としたい。その内容は「日本一の貧乏藩であつた薩摩藩の財政を建て直し、明治維新の経済的基礎を築いた調所広郷の評価について、調所の偉業は、その後藩主を襲封した斉彬や西郷・大久保などの元勳たちから「奸曲私欲ヲ専ラトシ、国体ヲ損ジ風俗ヲ乱シ、邦家ヲ覆シ危キニ至ラシメ」と憎悪され、調所関係史料の多くは焼き捨てられた。斉彬が藩主となつた場合には財政危機の再発が懸念されるとして斉彬の藩主継嗣に反対したことなど、政治的な問題が輻輳した結果とみる。斉彬藩主襲封への反対が斉彬による調所否定となり、斉彬を尊崇する西郷、そして大山県令に引き継がれ、調所に関する文書・記録の焼毀によって彼の偉業は歴史の中に封印されてしまった。封印された調所の偉業を解封した人物は以外にも、鹿児島人ではない渡辺千秋鹿児島県令(信州出身)であつた。調所の業績を明治新政の参考にするため、調所の腹心で政策に通じた海老原宗之丞に諮問し、明治15年(1882年)に提出された代表的調所広郷関係史料として知られるのが『藩政改革ニ係ル件及ヒ調所笑左衛門廣郷履歴概略』である。最後に西郷隆盛や名越左源太が、口永良部島へ到着したにも拘わらず「密貿易」に関する記録がない事が不思議である。

## 参考文献

1. 芳 則正. 調所広郷. 出版地不明：古川弘文館, 2020年11月1日.
2. 徳永和喜. 調所広郷が育てた海商濱崎太平治と藩武器調達. 出版地不明：敬天愛人 第30号, 平成28年9月24日.
3. 原口虎雄. 幕末の薩摩一悲劇の改革者、調所笑左エ門一. 昭和41年4月20日.
4. 大矢野 栄次. 薩摩藩の財政改革と調所広郷. 出版地不明：久留米大学 経済社会研究

---

<sup>16</sup> 屋久島法務局確認済み(原本写し有)

第58巻 第1・2合併号, 2018年6月.

5. 台明寺岩人. 斉彬に消された男一調所笑左衛門広郷一. 2006年12月19日.
6. 高良倉吉ら. 琉球・薩摩交流史の痕跡. 2004年.
7. 野田幸敬. 島津家家臣団系図集 上・下. 出版地不明: 南方社, 2019年6月1日. P26
8. 霧島神宮誌編纂委員会. 霧島神宮誌. 2019年. 9月
9. 川島元次郎. 南国史話. 大正15年. 5月. P313
10. 深井甚三. 近世日本海海運史の研究. 2009年1月10日.
11. 深井甚三. 銭屋五兵衛と抜荷. 2008年. P120
12. 徳永和喜. 海洋国家薩摩. 2011年4月日.